

レクイエム
我が鎮魂曲

——故き先達に導かれて——

村上英治

23歳 臨床の仕事をはじめて2年 彼女は何時もの仕事は自分に向いていないのではと悩み 無力さに苦しみ

私のところに来た時は 糸の切れた風船のように頼りなく 儂く

それでもほんの少しは私を信じてくれていたと私は勝手に思い

私へのヴァレンタインのチョコレートを買って

2月13日 突然に姿を消してしまった

2月14日 私との面接の約束をしたまま

3月31日 北の湖のほとりで凍死した彼女が発見されたチョコレートと一緒に

彼女の母は「3月31日が過ぎたら きっと元気な姿をあらわしてくれると思っています」と言っていたのに

「貴女に死ぬ理由があるのなら 私にだって死ぬ理由はある」

その時 私はそう呟いた

——中略——

2ヶ月過ぎて少しづつ気づきました

私は彼女の死を受け入れることができなかったのだとできなくて21, 2歳ごろの自分にしがみついていたのだと

でも気づくことが一体何なのでしょう

私の心がほんの少しだけ楽になるのでしょうか
私が楽になって 一体何になるのでしょうか

私はただ

彼女の死への出発の

立会人にすぎなかったのだろうか

心を閉ざすことばかり

日常がとぎれると 辛いことばかり

35歳 自ら死を選ぶ可能性さえ なくなった35歳

何度も幾度も

同じ言葉の繰り返し

迷って迷ってずっと手元にあったこの手紙

やっぱり投函します 甘えてしまいます

この年6月はじめ、私の手元に寄せられたこの便り、

10数年前、私のもとを巣立って病院臨床の道わけいり始めた、厳しいまでに、ただただ自分自身を問いかけつづける、ひとりの女性の心理臨床家からのものである。

臨床経験37年、今こうして退官を前に、走馬燈のように浮かび上がってくる、私にとって忘れることの出来ない患者・クライアントのひとりひとり、改めてカルテを繰ることもなく、その姓はもとより名前まで、その顔かたちや症状も今なお鮮やかな人、その数ふっと思いつくままに116名にのぼる。そしてその内、自ら生命を断っていった人また12名、ひとりの心理臨床家として自らの力足りなさを心に詫びつつ、今さらの如く厳しい思いにさらされる。

どのような言葉を返すべきか、ためらいつつ、1ヶ月後に私は彼女に返事を書きしるした。

お便りいただいて1ヶ月経ちました

ふたたびみたび重い思いがジツトリと澱んで カラ梅雨なのにやはり湿っぽいこの季節がら すなおに すんなりと筆を運ぶことができませんでした

人の死の厳しさと儂なさと

そしてそれだけに 生きていることのイジラシさと

ヴァレンタインのチョコレートを抱いて北の湖に沈んだ あなたよりちょうどひとまわりも年下の彼女の前に自分自身をダブらせて ただ佇んでいるあなた それにダブらせて また私自身も佇むよりほかにはないのです。

このお便りいただいて数日後 あなたも御存じ センターの心理判定員Y君の急逝のしらせに接したのです 年齢37歳

ただ耳疑い 胸ふさがれて通夜の席 その遺影の前に立ちすくむしかなかった私

その前日お風呂の中で眠るが如く往生したという彼のすがたを発見したのは まだ小学校4年の彼のひとりっ子だったと聞きました。涙もすっかり涸れはてて ただ空虚の眼を向けるだけのその夜の彼の妻

人の死の厳しさと 儂なさと

そして切なさを またまた思うのです

また別の話

黒いネクタイである人のなきがらに 火葬場で別れを告げたのは まだ3日前

60歳の退官を前にした現職の校長さん その地方の教育界での重鎮だったと聞きます

その長男が学生相談室での私のクライアント 入学以来 今年で9年目になります

ずっと息子の行末案じながら 私とも相談を重ねておられたその先生が がん分って手術を受けられたのはちょうど一年前 家族には知らされていても 本人はそれとは知らず 予後よいま復職されて元気な活躍つけておられたのに この6月25日 突然の腰骨の激痛で再入院 主治医から家族へは 骨への転移がきたとして もうなす術ないと知らされながら本人は なお快復を信じて私に「このような状況で再入院しました どうか息子をよろしく」と激痛こらえ おそらく最後の力ふりしぼっての一筆を葉書でよこして下さったその翌朝 予想以上に状態悪化して 意識混濁のうちに こうして再入院以降わずか4日目で息ひきとられたと聞きました 人の死の厳しさと 儚なさと そして切なさとを またまた思うのです

お便りいただいてこのひと月のうち 私はまだ今ひとり 私自身が今こうして私なりの心理学の道歩みいるのに 文字どおりの導きの星でもあった 依田新先生との最後の別れに列席して 状況はそれぞれ違うけれども この短い間に これで都合3人の方の冥福を祈られることになったのです

思いもかけず こうして死にいく人に接して 改めてまた私は生きぬくことの重味を感じさせられています いのち 生命ある限り生きぬきたい そして生きいく限りよりよく生きつづけていきたい こんな思いにかられるのです

いのち 若い生命を散り急ぐ人、思いもかけぬ病いに、志なかにして中道にたおれた人、天寿完うして安らかに眠りの道に入られた人、死にいくすがたはさまぎまでであろうとも、こうして厳しい死の現実に直面させられて、私自身安易な毎日をふりかえり、改めて生きているということの本質を問いなおさずにはいられない。

3年前、私自身還暦を迎えるにあたり、後学の人たちの厚情に支えられて、名古屋大学出版会から「生きること・かかわること」を刊行することができたが、その折も、今度はいつか「老いること・死ぬること」を上梓しなければならぬと話しあったことがある。今ここに退官を前にして、私自身、ひとりの臨床家として、何をしてきたのか、何をしてこなかったのか、貧しい歩みながら、その自分史を残しておくことも、使命のひとつかも知れないと思う。その種の思いをこめて、以下私自身の今日を培って下さった多くの先達、その多くの人たちがすでに幽明境を異にされて、今さら何のお酬いもできないことを恥じなければならぬが、その故き先達から導かれてきたささやかな歩みを、ここに書き残しておくことにしたいと考える。

I 生い立ちの記

地下鉄伏見駅上、伏見通と錦通の交叉点、今から63年前、私が生まれ育ったところである。ゴバン割りと称した名古屋の旧市内のどまん中、そこで私は昭和20年、戦災で焼けるまでの20年間を過した。古い屋並みの一画にあった私の家が、焼けおちて廃墟と化したその朝のことを私はまだ忘れられない。あたり一面焼野ヶ原だった。蔵書家だった父の遺愛の書物も何とかその形だけは残しながら、防空壕の中ですべて灰燼と帰っていた。そっと支えるように両手にかかえると、パラリとその形が崩れおち、折しもそよぐ一陣の風に灰が一面に散っていったのがきわめて印象的でもあった。堀辰雄にいたく心を惹かれていたその頃、状景も情緒もまったく異なるものではあるけれど、何故ともなくそんなとき、堀作品「風立ちぬ」の冒頭 Paul Valery の訳詩「風立ちぬ、いざ生きめやも」の一節が浮かびあがってきたことを、今鮮明に思いおこす。10代終える頃の若者の感傷とそれは云えるであろうか。

それはまた、その空襲での顔面の火傷がもとで、その後2ヶ月あまりの闘病のあと、不慮の死をとげた父親への追憶にもつながる。別に学者でも、研究者でもなく、一介のサラリーマンにすぎなかったのに、父はこよなく書物を愛した。地誌、歴史書、小説本、ありとあらゆる雑書にうづもれて、手当たり次第に濫読していた父を今でも思いうかべることが出来る。あの空襲の夜、無数の焼夷弾をまともうけて、一部は疎開させていたものの、大部分の書物がそのままになっていた部屋が、一度に真赤に燃え上がった。それこそまったく無力を承知で、ふりしきる火の粉に向かって、父と共に消火にあたった私の眼に、書架の背文字の金色が痛いほどつきささった思いが、今なお鮮かである。

私が学んだ小学校もその時全部焼けおちた。今再建されて、観光ホテルの北側にある御園小学校、その前身、園町小学校がそれである。当時珍らしい男女共学のクラス編成であった。そしてその小学校1年生から3年生までの担任が、吉川小ちょう先生、人を愛することの美しさ、生涯学びとおすことの厳しさを、身をもって教えてくれた人のひとりである。小学校を卒えたのが、昭和12年、今年昭和62年3月が私にとってちょうど卒業してから50年目になる。戦前も戦後もひきつづいて数年に1回は、同窓の友と宴をともにするたびごとに、その吉川先生はいつも顔を出してくれていた。停年まで名古屋市内の小学校の先生を歴任したあと、職退いてからも、社会教育の研鑽を忘れない人だった。私が講師をつとめた婦人学級の聴講生として、その教室で顔をあわせ、お互い

バツの悪い思いをしたこともある。“偉くなっても、村上教授とか、村上先生とかよばないよ。私にとっては昔のままの英ちゃんなのだから” そんな前置きして、いつも言葉をかけてくれた先生だった。

その先生を今度も50年記念の同窓の集いによんで交情深めたい、そんな思いの矢先に、先生はこの年桜花咲く春4月を待たず、幽明境を異にされた。突然の訃報に言葉なく、受話器を持ったままの私。80歳越えてなお、社会見学に足を運び、朝日新聞“ひととき”欄に寄稿を欠かさぬ先生から、折あるごとに、人間同志励ましあって生きていくことの美しさを教えられたように思う。

クラス40数名の仲間のひとりひとりを、ほんとうに何の差別もなく愛された先生は、私どもの担任を3年間つとめられた上、また1年生の担任に戻られて、そこで私の発達遅滞の妹の面倒を、普通学級の中でみて下さることになった。50数年前、今日でいう交流教育の原点を私はここに見る。心身障害児に対する私自身のかかわりの姿勢はまさしくここから育かれたといってもよい。

愛知一中を終えて第八高等学校に入るまで、私ははじめて1年間足らずの教員生活を体験した。当時国民学校とよばれるようになった小学校の助教、いわゆる代用教員が私にとって、教育の仕事にたずさわようになった端緒である。戦雲きびしく、軍靴の高鳴る昭和10年代の後半は、今から思えばたしかに暗く重い時代ではあったけれども、それまでの教育指導をうける立場から一転して、私は半田市乙川国民学校の4年生に、教壇から向きあうことになった。まさしく無我夢中であつたけれども、それこそ私なりの思春期、ひたすらにそれこそ降りしきる雪の中、裸になっての体操など、彼らになま身でぶつかっていったことを、今なつかしく思いおこす。

教員生活といえば、ちょうど学制改革のはじまったばかりの昭和23年の春から3年ちょっと、東京大学文学部学生としての身分でありながら、非常勤講師として、東京都渋谷区立代々木中学校で、英語を教えたことも、私にとって忘れられない貴重な体験である。私自身、その学校の校舎の片隅に寝起きしていたこともあって、戦争直後の厳しい世相中でありながら、やはり思春期潑刺とはねまわるその頃の新制中学の生徒たちと、お座なりのアルバイト教員の域を越えて共に学び、共に遊んだ交流は、それから40年近く過ぎた今なお、深く広くつづいてきている。私の教員経験のこれまた貴重な一里塚である。

はからずも、昭和57年4月、附属中学・高校の校長を併任することになって、今度は豊饒の時代の思春期まったただ中、青春をひたすらに謳歌する子どもたちとのつながりが得られた3年間。中でも必修クラブを自らすすん

で担当して、高校生の諸君と週にたった1回の限られた時間ではあっても、ひたすら親しく接することの出来た機会が、私のささやかながら高校教員の生活の経験として位置づけることを許されるならば、私はこうして、小・中・高、そして大学、さらに大学院と、いわゆるライフ・ステージの中での学校生活のあらゆる局面に関与し得たことになる。私にとって幸運これに過ぎるものはない。

私自身の青春期に、始めてのあの乙川国民学校での教員経験が、私のその後の志向性にどれほど強い影響を与えてきたことになるのであろうか。私自身の記憶はさだかではないが、そのあと旧制第八高等学校をふたたび受験して、第2次試験での個別面接が行われた際、私は、それこそ若気の到りで、自分の経験した教育の場での私なりの気負いを、面映ゆいながらそれこそ滔滔とまくしたてたようである。理科の学生であった私の面倒をよくみて下さって、理科よりお前は文科にすんだがいいとまで励まし、卒業してから、大学時代も、またそのあと名古屋に戻ってからも常に配慮を絶やされなかった、学制改革後、南山大学に英文学の教授として移られた今川憲次先生が、折あるごとに、また酒の席などで、繰り返し私に向かって思い出話として語られたのが、このことである。わずかばかりの体験を鼻にかけて生意気に熱弁ふるったであろう青二才の私も私なら、それをまた真摯にうけとめて聴いて下さり、いつまでも覚えていられた先生も先生である。でもそこに、私は回顧趣味といわれるかもしれないが、旧制高校における、師弟のこころの交流を垣間みる。先生は昭和59年4月のある朝突然たおれられた。こよなく旧制高校を愛された先生が、私との別れには、寮歌で送ってほしいと常々語っておられたのに従って、南山教会の門を出る枢に「春は日影」をみんなで歌いながら、永却の別れを告げたのが、まだ昨日のように思われる。

II 心理学への第1歩

教育に心ひかれる思いは、こうしてこの頃芽生えたことはたしかであるけれど、そのときまだ確たる心理学への志向があったわけではない。もともと理科学的学部を専攻するつもりはなく、戦時中のこととて、ただ入学しやすさのために、理科に入り、従ってそちらの教科に当身の入らなかつた私にとって、文科系の講義は、先の今川先生の示唆をまつまでもなく、むしろ私にとって親近的であった。心理学の講義に始めて接したのもこのときである。学制改革で、新制名古屋大学教養部の教授に移られ、昭和30年、私が教養部に席をうつして、また親しく昭和41年退官されるまでの11年間、研究室を隣にした

阿部芳甫先生が、終戦後はじめてマクドーガルのグループ・マインドを講述されたことをはっきりと覚えてはいるが、正直いって、それは決して面白いものではなかった。それだけだったなら決して心理学を、その後の進路として選択することなどはおそらくなかったことであろう。

ただ何といってもこの阿部先生の人間味には、いたく心を惹かれるものがあった。古武士の如き風格からにじみ出る、先生自身の経験に裏づけられた信念に支えられての学生に対する態度は、毅然として、一見人を寄せつけぬ様相を示しながらも、一たんその懐にとびこむならば、その前で、私たち自身ほんとうに心を虚しくして自己を開示することができ、そうした学生をまた心開いて受け入れて下さる先生だった。その先生から私は何よりも、人間性の豊かさを学んだと思う。

戦時中、時代の厳しい制約で、おそらく心ならずも、役割上、生徒訓育・修練の立場から、私たちを指導せざるを得なかった先生が、色々とその折の定めを犯す私たち、少しばかり斜め右上、天を仰いだ形で、こんなとき、真に困った形で悲しげに訓戒垂れられるその苦衷を、私は後にもよく聞かされた。先生自身の真摯さ、誠実さの故の苦悩でもあったのであろう。人間、この未知にして尊厳なるもの、それへの畏敬を失うことなく、こよなく人間を愛し、人間とかかわることの大切さを、こうして私は先生から肌で教えられた。

空襲、そしてそれに伴う事故で、先にも述べたように、戦時中父を亡くした私に、先生は、学徒動員に出ていた大同工場での休み時間に、ひとこと優しく言葉をかけて下さった。痛みやすい青春の胸は、ただそれだけでうち震えたことが、今なお心に残っている。

戦争敗れ、講義は再開されたが、それより私には、学舎再建のために運動した、今日という自治会活動への没頭の方が印象的である。河和移転を図って、先生がたいろいろ画策した中で、はからずも阿部先生と同宿した寝苦しい夏の一晩、それこそ夜を徹して先生が、私のこれからの進路に関して相談にのって下さったことが、私自身、文学部を選び、なお教育学への選択をためらいながらも、心理学への傾斜を固めさせたことになる。心理学を学ぼうとこうして決意せしめたのは、決して先生の講義からではない。その独特の人間味にいかばかり影響を受けたが故のことであろうか。

そして私は東京大学へすすんだ。53年8月、逝去されたその頃の主任教授、千輪浩先生の難解ではあったが緻密な講義をとおして、ゲシュタルト心理学の清新さに触れ、心理学一般への興味と関心を深く抱かされるようになったのはこの頃である。その内容をまた平易に解説さ

れて、私どもにとって心理学が決して思弁・抽象の学ではなく、まさしく日常的な具象の生活の中に根ざす学問であることを教えていただいたのは、その頃助教だった相良守次先生であった。この2人の先生から私はたしかに心理学という学問の奥深さと、またその巾の広さを学ばされた。実験心理学の殿堂といってもよい東京大学文学部の心理学教室に学びながら、今こうして、伝統的な心理学の枠組みからまったくはずれた領域を自由に歩ませていただいているのも、もとはといえば、この両先生のおかげである。

個人的にも先生がたにはずいぶんお世話になった。卒業後の就職に関して、千輪先生には痛く心をわずらわしたし、相良先生には、お故くなりになった昨年11月まで、私の初期の留学中、サンフランシスコでの交流をもふくめて、ずいぶん色々厚意を寄せて下さった。一介の心理学徒としての出立ちを支えていただいたことに、今深い感謝を捧げたい。

昭和25年、大学を卒え、青山学院にしばらく籍をおいたあと、その翌年、名古屋へ戻り、医学部、教育学部を経て、第八高等学校の焼け残り、旧南寮あとの、ガタガタになった木造校舎、その心理学教室で、阿部先生にまた薫陶をうけ、ならんで、心理学講義・実験を始めるようになったのは、昭和30年の春のことである。阿部先生退官されるまでの11年間は、まさしく今日の名古屋大学教養部心理学教室の基礎がための時期でもあった。昭和35年から37年の2年間、フルブライト研究員として、カリフォルニア大学人間発達研究所で研学する機会を得て、東山移転への一番大切な時期、出国したまま戻らなかった私に、慎懣やるかたない思ひは強かったであろうに、当時若かった私の将来を思いやって、じっと我慢していただいた先生の寛容さに、ある意味ではただただ甘えるばかりの私であった。

昭和41年2月、粉雪舞う日の最終講義、ケーラーの実験をとおして、喝破された「サル開眼」の精神は永遠に私自身の覚醒ともなる。それはとりもなおさず、私自身の「心理学への開眼」につらなる。心理学への道、そして何よりも人間としての道、こうして身をもって教示していただいた先生のところを体して、改めて私自身への自戒ともしたいと思う。

昭和61年9月、かねて身体をこわされていた先生の訃報にはからずも接した。酬いること少なかった私。先生が示していただいた数々の御芳情に、感謝の思いまたひとしおである。

Ⅲ 臨床の扉を叩く

生れ故郷、名古屋へ戻る直接のきっかけを作ったのは、第八高等学校・東京大学を通しての先輩、もう15年も前、昭和47年3月に夭折した杉田裕さんである。杉田さん自身、名古屋大学医学部精神医学教室の教授であった杉田直樹先生の御長男でもあって、杉田教授のあとをつがれた村松常雄教授が、彼を介して、その教室で臨床心理学者を養成しようとのプロジェクトに応ずる、心理学の卒業者が東京大学にいないかと求められたことによる。

昭和56年9月、先生はこの世を去られたが、伝統的なドイツ流精神医学の踏襲にあきたらず、夙にアメリカ流力動精神医学の思潮を受け入れてこられた人だった。戦後いち早くアメリカに渡り、そこで展開されていたプロフェッショナル・チームをわが国の精神医学の場にも導入しようと思図されたのである。ホリスティック・ダイナミックをうたい文句に、人間学的精神医学を提唱された先生は、この種の視点に立って、アメリカ資本の援助を得て、このプロジェクトの推進に一步踏み出され、名古屋出身ということで、私自身が、杉田さんの推輓をうけることになったのである。ひとつの因縁でもあつたらうか、父を喪ってすでに6年、大学を出て、大学院に籍をおき、一応青山学院大学助手の職を得ながらも、名古屋郊外に住む、母と発達遅滞の妹との生活を案じなければならぬ私にとって、名古屋での就職の口はまことに願ってもない話であった。

東京大学の研究室で教えるをうけながら、実験心理学一辺倒に与することに、いささかの抵抗を感じつつ、さらに、国民学校・新制中学での教育経験も大いに影響していたこともあって、卒業論文から「友人構造の一研究」といった教育心理学的領域に踏み入りかけていた私にとっても、しかしこの精神医学への誘いには、その当時においてたしかに何らかの戸惑いとためらいがあったことは否めない。精神薄弱の妹との生活はあっても、精神病者の世界は私にとって未知のものであり、不安は免がれなかった。ただその際、杉田教授の長男である裕先輩のたつてのすすめと、その頃パイオニア的に国立国府台病院での臨床実践に足踏み出しておられた、現在日本の臨床心理学の先達ともいえる佐治守夫先輩の動きを垣間みていたことだけが、私に決意固めせしめる契機となったことはまたたしかである。かくして昭和26年6月、私は名古屋大学医学部精神医学教室の扉を叩いたのである。

思えばこの教室は、村松先生の包容力と人徳もあって、実に自由、潤達な雰囲気にも満ちあふれていた。今までの心理学の教室とも、教育の現場とも、かなり様相を

異にする、いろいろな意味で異質であった筈のその教室で、私は医療スタッフの中にあつてほとんど何の違和感も抵抗も感じることなく、ほんとうにのびのびと私の新しい方向性を踏み出そうとしていた。

私の仲間との共著「心理臨床家——病院臨床の実践——」（昭和57年、誠信書房刊）のあとがきに、私はこの新しい出立ちを次のようにかきしるしている。

ゆりのもてたよい時代でもあつた。外来での医師の診察に立ちあつて病棟へ戻つたあと、一緒に風呂を浴びながら、それこそ文字どおり裸になって、その日のケースのあれこれを語りあつたそれらの思い出を、私は今もなお忘れることはできない。臨床の「心」をこうして肌で学ばされたのである。医学、そして精神医学は、かくも人間味豊かなものであるのか、伝統的な実験心理学を学んで、何かしら人間疎外に絶望させられていたその頃の私に、それは目くるめくばかりの人間の出会いであり、ある意味では、始めて人間の「心」とふれあう機会を与えてくれたといつてもよい。

ロールシャッハ法を学ぶこと、それが本来私に課せられた課題でもあつた。しかしそのことだけにこだわらない自由な学風を、村松教授をはじめとするその教室は作ってくれていた。いわゆる科学的、診断的な眼で、人間を客体としてのみとらえる視点を根本的に打破して、なまみの人間の「心」そのものに内側から迫ることを一途に意図しようとする、私の今日準拠する学問的立場の土壌は、ほんとうに、ここで培われたのだと思う。

私自身の学問のハイマートは、やはりこの精神医学教室での原体験につながる。それはまさしく心理臨床家としての巣立ちの場でもあつた。

たった10枚のカードでありながら、何故これほどにまでロールシャッハ図版は私どもをひきつけてはなさないのだろうか。臨床の場における人間接近への具として、この技法は、今はそれほどでないけれども、私にとって数十年にわたる文字どおり友であつた。村松教授のもとへ日米比較研究に來た、現カリフォルニア大学教授 Dr. DeVos に導かれて、これまた若くして昭和47年9月、世を去つた精神科医植元行男君と共に学んだ思い出も尽きない。紹介とり入れの初期から、「名大スケール」確立をめざしたスコアリング体系拡充期、広くカルチャーへの関心期、そして現象学的オリエンテーションに傾倒してのそれからの時期と、それぞれ展開を伴つて、私自身の心理臨床家としての深まりを見る。しかもそれをただに診断の具にとどめることなく、あるいはまたそれらの図版を用いようと、用いまいと、臨床の場で、私自身の眼前にある、心傷つき、魂病む人との出会いと、かかわりと、それらをつみ重ねて、そこに人間存在の根源的様態をよみとり、「臨床」の本質を模索しようとする私の志向性に、植元君が遺した影響を忘れら

れないのである。

欧米から遅れること数十年といわれながらも、日本の臨床心理学の今日の発展はすばらしいものがあると思う。「日本臨床心理学会」自身が今なおかかえる、臨床心理学の体質そのもののありかたへの、きわめてきびしい問いかけ、そして批判を、私自身じっくりうけとめつつも、「心理臨床家の集い」を重ねて、「日本心理臨床学会」の設立へと私なりの努力を重ねながら、この昭和62年11月、私ども名古屋大学が世話をした、「日本心理臨床学会第6回大会」の総会で、「臨床心理士」の資格認定への歩みを大きく一歩踏み出すことになった。今「日本心理臨床学会」は、そうした方向に力強く賛同し、外なる枠組みとしてのこの資格を身に体すると共に、それにかなる内的資質を充実せしめるべく、厳しい自己研修・相互研修をめざす仲間を2,800名かかえることになった。36年前ささやかに踏み出した私自身の歩みをふりかえるとき、今また感懐の思いひとしおである。

IV 心身障害児者の世界

病院臨床はかくして私にとって、真実、臨床の原点であり“こころ”でもある。しかし私は、この医学部精神医学教室で、時の助教授、後に教授となり、さらに退官後、日本福祉大学学監をつとめられた、堀要先生に出会って、もともと妹との生活の中から、決して無縁ではあり得なかった、精神薄弱者との取り組みを、臨床の仕事として始めたことを嚆矢として、以降30数年に及ぶ、広く心身障害児・者の世界を、同様私自身の大きな柱と考えてきた。その何よりも導き手であった堀先生も、昭和58年12月、その生涯を閉じられて今は故い。哀惜の念強いものがある。

わが国における児童精神医学の先達でもあった堀先生、先生とはもうほんとうに公私共長いつきあいであった。理事長をしておられた「あさみどりの会」でもずっと御一緒してきたし、障害をになった子どもたち、またその母親たちへの深い理解を示され、暖かい愛情を寄せられるその姿勢から、またいかばかり多くのものを学ばさせられたことであろうか。

名古屋市の特設教育の草分けの時代からこれを育ててこられた。その驥尾に伏して、私も今日まで、名古屋市特設教育30数年の歩みを一緒にすすめてきたと思っている。木曾駒、こがら山荘、中日サマースクールにも何度御一緒したことであろうか。そこでは先生は、ひとりびとりの母親たちに、その相談をうけて適切な助言をいつも与えて下さっていた。たまたま時の愛知県知事桑原幹根さんが、下の高原のゴルフ場にやってきたついでに、このキャンプ場を訪れてくれたことがある。その折全員

そろって山荘の外にならんで迎えたのだが、ちょうどその時、母親の面接中だった先生は、決してそれを中断しようとはされなかった。桑原さん自身、宿舎に入って先生に挨拶されたのを、その折お傍にいて私もよく覚えていた。「今この子たちの相談で手はなせられませんから」とひと言おっしゃってまた相談つづけられた先生の姿に、深い感動を覚えたことを、今なお忘れられない。

「あさみどりの会」が経営する「さわらび園」の子たちを、また「わらび福祉園」の青年たちを、先生はほんとうにわが子のように愛して下さった。市立の作業所での定期的健康診断も、奉仕的に何年もつづけられて、私の妹も母も、そこですっかり先生のお世話になったことなど、深く心に焼きついている。その母も昭和56年8月、83歳で天寿を完うした。その母の最後に立ち会ったのがこの妹であるのも、私にとってはまたひとつの由縁でもある。

こよなく酒を愛した先生だった。一緒に酒酌みかわしては、「酒呑みは、酒呑めよ」童顔一ぱいほころばせて、高唱する先生の歌声が、障害児・者のこころを、私の心に直接伝えてくれるように思われるのである。

酒飲みと心身障害児、私にとってまたこの道で忘れられない先達は、私自身を村松先生に結びつけ、臨床の道分けいれさせてくれた恩人ともよぶべき杉田裕先輩である。文字どおり酒仙とよぶにふさわしい人だった。没後15年にもなるというのに、彼の酒にまつわる逸話は、なお精神薄弱教育界では、その機知とユーモアと共に、数々の伝説ともなって脈々と語り伝えられているのである。乞食に金を借りて、その翌日返しにいったら、また借りられるとして逃げ出されたという話、心臓発作を心配しながら、しかし何とか畳の上で死にたいと、いつも畳表の切端をポケットに入れてもち歩いていたという話、研修所の2階の窓から外へ出たら、地面が低すぎ、引力の法則に従って落下した結果、背骨を折って車椅子の世話にならざるを得なくなったという話、もうどこまで本当か分らないところもあるが、こうした数々の奇行が、みな酒に由来するものであって、その結果多くの人に迷惑かけることも多かったとしても、また誰からも憎まれることのない、まさしく天真爛漫を絵に描いた人として、今なお語り草になっている。

真底酒に惚れ、酒に惚れられた杉田さんであるけれど、惚れたといえ、またこれほど精神薄弱児を愛した人を私は見たことがない。かつて私自身、「精神薄弱児に惚れるということ」と題した雑文を『愛護』誌上に寄せたことがあるが、そのとき惚れて惚れて惚れぬいた人の代表として彼の名前を掲げたことを思い出す。学問的・理論的というより、肌で精神薄弱児と接し、彼ら

の内に分けいって学ぶことを、杉田さんはそれこそ身をもって私に教えてくれたのである。

心身障害児・者の世界に大きく眼を見開かせてくれた先達は、決してこの2人には限らない。昭和59年6月幽明境を異にされるまで、文字どおり日本の特殊教育と共に歩まれ、この方向性をはっきりと明示して下さった元東京大学教授、そしてそれよりも旭出学園の園長として、この領域の指導者の筆頭として知られる三木安正先生、そしてまた、設立当初からずっと国立特殊教育研究所の所長として現職のまま昭和54年4月、世を去られた辻村泰男先生、また民間人でありながら、堀先生らと共に、「あさみどりの会」を創設し、故き糸賀一雄先生の福祉の理念を顕現することにつとめられ、その同年8月に故くなった伊藤方文さん、身近に、私の今の基礎づくりに参与して下さった人々を、私はまた次々と思っておすのである。

これら多くの故き先達に導かれて、私にとっていわゆる福祉臨床への旅立ちが始まった。そしてそれはまた名古屋市における特殊学級設置の歴史とほぼ時を同じくし、さらにまた、愛知県春日井市にある心身障害者コロニーの設立と共に大きな脱皮をとげることになる。対象としては、中度・軽度の精神薄弱児との取り組みから始まって、それこそ重度・重複・重症の心身障害児・者へのかかわりと展開する。方法的にも、従来の伝統的な心理学のオリエンテーションにもとづく調査・観察・面接といった技法でもっての外側からの接近を超え、障害児・者たちのひたむきに生きぬく根源的な人間存在の意味をじっくりと受けとめることによって、「私の内なる障害児」を実感として体験せざるを得ない転換が、そこにはある。それはまた、ひとりの臨床の学徒として、貧しいながら、ささやかな実践をつみ重ねていく中で、私自身の臨床領域のいかなる分野にもつながら基本的視座でもあり、とりもなおさず、それが私にとって今日の臨床の“ところ”に他ならない。

V キャンパスでの学生と共に

「病院臨床」「福祉臨床」とならんで、如上の志向性に即しての、私にとっての今一つの臨床の柱、キャンパスの場での学生との取り組みを、私自身「相談臨床」とよんでいる。大学人として37年、教育・研究の場において、私は本当に数多くの学生諸君と接してきた。大きな夢を画き、明日に向かって雄飛することを目論む、意気揚々とした学生諸君に期待するところは当然のように大きい。しかし中には、せつかく希望の大学に入学はしたものの、しばらくたつと、現実の齟齬はあまりにも大きく、いつしか夢破れ、意欲減退し、無為自閉といった、

いわゆるステューデント・アバシーの状態がつづき、果ては登学拒否、留年、退学、ときには自殺にまで到るところの、キャンパスにおける一群の挫折者たちがいることにもまた眼をそむけるわけにはいかない。それらの決して精神的な障害をもつとはいえない若者たちへの、援助の手をさしのべるべき機関として機能してきたのが、学生相談活動の一環である。

昭和30年代の前半、名古屋大学学生相談室が設けられて以来、それを私は「相談臨床」の場として今日まで、私なりの努力をまたつづけてきた。その基盤を培った初期の1人として、私はまた個人的には村松常雄先生に負うところも少なくないが、こうした学生相談活動が、単に私ども名古屋大学における課題として提起されるばかりでなく、広く共通の問題をかかえる国立大学相互の連絡を密にすることの必要性を提起し、今日の「全国学生相談研究会議」の礎を形づくって下さったのは、広島大学教授であった久保良敏先生である。昭和30年代の後半から40年代に入るに及んで、キャンパスで当時一番問題になったのが留年現象であり、時を同じくしてそれに取り組んだ、広島・京都・名古屋三大学を中心に、昭和43年宮島で開かれた、通称留年シンポジウムがその活動の矯矢となる。毎年成人式をはさんで、その前後に開催されたことから、人呼んで成人式シンポとか、その翌年から、白浜、蒲郡、道後、別府、山中、西条、鳴子など、何故か温泉地で行われたこともあって、温泉シンポとかよばれながら、その後若干の改組はなされてはきたが、1年もかかさず、今年の1月まで20回の研究会を年に1度もちつづけてきた。新しい大学の入学制度に対応して入学してくる学生諸君の、意識の変容をも常に念頭におきながら、キャンパスの学生群像の赴く方向性への模索をつづけ、それに対処するところを、カウンセリング・マインドとよびならして、真摯な症例研究を重視するこの種の活動を私は、他の臨床の柱と同様、きわめて大切にしたいと考えている。

たまたま昭和53年1月、箱根において第11回目の研究会議がもたれた直前、この集いの生みの親ともいえるべき、久保先生の訃報に接した。広島大学退官されて、まだ間もないころのことであるだけに、哀悼の思い切なるものがあつた。先生御自身直接に指示し、指導の口をさしはさまれる人でなかっただけに、その寛容さに甘えて、私どもは自由に、その前で学生問題を論ずることができた。その会議の仲間です自主的に始めた教官エンカウンター・グループにも必らず顔出して下さって、おだやかな微笑うかべて静かに見守っていただいた、その温顔を私はいつまでも忘れない。学生を、若者をこよなく愛して下さった先生だった。

VI 「人間の学」としての心理学を

私の手元に、今は古典ともなったが、昭和31年国土社刊、「現代の教育心理学」がある。名古屋大学教育心理学教室において企画された2つのシンポジウムの記録がそれである。その最初のシンポジウム「教育心理学の在り方」は、續有恒先生の提言にもとづいて、時の教育心理学の第1線の指導者ともいふべき、当時名古屋大学教授の依田新先生が「技術学として」、京都大学教授の正木正先生が「人間形成の学として」と題するそれぞれの立場からの問題提起をなされ、それをその両先生のまた先生筋にもあたる北海道大学教授城戸幡太郎先生が「調和の試み」と題して、それらの見解の止揚をめざされた、きわめてユニークな、教育心理学の本質そのものへの問いかけとして、その当時のわが国の教育心理学界に頂門の一針を提起したものと考えらる。

それに関与された4先生ともすでに鬼籍に入れられて、今その訶咳に接する術もないが、ここでの問題提起は、教育心理学の不毛性を憂え、教育事象への実践的寄与を強調しようとする心ある教育心理学徒にとって、刊行後30数年たった今なお、貴重な原点として多くの影響を与えてきた。私自身若き日に、これに刺激され、触発されて、今日の実践の学への志向を内在する人間学的心理学への基盤を形成されたことに、また深い謝意を表すものである。

正木正先生と依田新先生の、東京大学在学中、また卒業されて以来の、それこそ心友とよぶにふさわしい親交は、今もなお語り草となっている。昭和34年9月、若くして逝かれた正木正先生を偲んで、依田先生はその追悼録「思無邪」に寄せて、その人間学的基盤の上に教育心理学の体系をうちたてようとしたきわめて独自の、厳粛な理論を高く評価される。ネズミ心理学とヒルティ心理学との統一の過程の中に、科学としての心理学を堅持しつつも、教育事象における人間そのものの内的形成のありかたを、自らすすんで教育実践に身を挺して解明することをめざされた視点がここに躍動する。稀に見る良心的な学問的態度を貫かれた先生が、夭折されることなくその後長く仕事をすすめられたなら、日本の教育心理学また大きくその在り方を異にしたかも知れないと、その志向に惹かれること強い私は、こうしてまた思いを新たにす。

そのシンポジウムでは、正木先生と一応対局的な立場に立たれたように見られる依田先生また、きわめてきびしく心理学における方法論の抗争に悩まれたように思われる。愛知学院大学文学部紀要（昭和53年）に寄せられた論稿“心理学における折衷主義”はまさしくその

副題にも掲げられたように、ひとりの心理学徒としての先生御自身の苦悶の表現に他ならない。

45歳の若さで学部長として赴任され、創設直後の名古屋大学教育学部の基盤作りに専念されていた先生の、まったくお傍に助手として勤務した3年間、それからしばらくして東京大学に移られ、日本女子大学を経て、同様、東京大学の同窓であり、名古屋大学の同僚でもあった、そして昭和54年に逝かれた近藤貞次先生の当時在職しておられた愛知学院大学に、ふたたび席をおかれた先生から、また私自身いかばかり多くのものを学ばされたことであろうか。何ごとにも真摯で誠実で心暖かな先生であった。酒をまた心から愛されては、興到ると、時に心静かに吟唱されたのは、高等学校でも先輩にあたることになるのだが、その第八高等学校寮歌「伊吹嵐」と、カチューシャの歌だった。

「行かか、戻るか、オーロラのもとで」先生自身、この文言どおり、名古屋と東京とを真底悩まれながら、行きつ戻りつされた。この葛藤はしかしながらただに地理的場におけるさ迷いを越えて、まぎれもなく、先生御自身の学問的系譜の上で、自然科学としての心理学と、人間探求をめざす心理学との両極をゆれ動きながら、先生の私淑されたオールポートと同様、これを切衷するところに、心理学の、また、教育心理学の課題があるとの信念を、この歌に象徴的に託されてのことと私には思われる。

先生に導かれての歩み、35年になる。はからずもこの年5月、先生の訃報に接して痛恨の思いひとしおである。それに先立つやはりこの年2月、ずいぶん久しぶりに碑文谷のお宅を訪れて、すっかり耳遠くなられた先生と、筆談をもまじえての楽しい一刻を過ぎたのが最後の別れとなった。去りぎわ、握りかわした先生の手のぬくもりを、私はいつまでも忘れない。

両先生より10年の後輩でありながら、先のシンポジウムの企画でもみられるように、両先生の仲立ちをされ、日本の教育心理学界に大きな足跡を残し、私自身20年の月日を近くにおいて、公私とも影響うけること大きかった續有恒先生の急逝を耳にしたのは、昭和47年9月、先生57歳のときだった。外の病院での治療面接中、この電話を受けたときの衝撃は、今なお消えざりがたいものがある。

研究室で斃られたこと自体、そのころ教育心理学の研究法を徹底的に洗いざらい検討しなおしてみたいとまで気負っておられた先生の、教育心理学への情熱と執念とを象徴するものといってよい。本当に研究の巾広く、何事にも意欲的に取り組まれた先生である。東京大学出版会刊行になる「心理学研究法17巻」はその意味で先生最

後の業績となった。お傍でお手伝いした私は、またその刊行の過程で先生からほんとうに多くのものを教えられたと思う。

「教育心理学の探求」、先生の死後、私どもは先生の遺稿をまとめて、金子書房から上梓した。探求という言葉は先生のお好きな言葉であったし、文字どおり理論の学と実践の学との止揚に向けての探求に、先生は終始しておられたように思われる。価値実現の働きとしての教育的営為をとらえられた先生にとって、教育心理学は価値の問題と当然無縁ではなく、そしてそれは教育状況における人間関係としての、指導者—被指導者関係を検討していく上で、基本的帰結としての教師論にもつながっていく。そしてそれは当然のことながら、心理学の究極の課題を人間に焦点づけることとなる。「人間の、人間による、人間のための心理学、また教育心理学」を模索しつづけられた先生の延長線上に、私は今あることをこうして実感させられるのである。

学問であることをやめることなく、人間自由へのあくことない探求、三先生に導かれての私は、今そのいわゆる科学的基盤というものに、それほど固執はすることなく、より自由に、主体的人間との、私流にいうなれば“なまの形で”“流れを追って”“かかわりの中で”といったアプローチを、臨床的状况の中で展開しながら、

ひとりの心理臨床家として、私の前に立つ相手方自身の人間存在の意味を問いかけつづけようとしている。しかしともあれ、こうした私自身の心理臨床への道歩みいだした源泉として、これら故き先生がたの、有形無形の教えがその基盤となっていることは間違いない。深い感謝の思いをここに表して、私の今日あらしめた諸先達の冥福を、改めて今心から祈るものである。

若くして先立った私の同学としては、本稿中にもあげた植元行男君のほか、高瀬常男（昭和53年7月没）、石黒大義（同年11月没）、また大橋正夫（昭和58年10月没）の諸君がいる。畏友とよぶべきこれらの友から、私自身多くのものを得た。また現在なお矍鑠として仕事をつづけておられる多くの先達から受けた影響もはかり知れないものがある。しかし本稿では、そのトピックス、故き先達に導かれての、私にとっての鎮魂曲にとどめた。これら同学また先達の方々の御厚恩に、ひとしく謝意をまた心から表すものである。

この62年度後期、「心理臨床への道」と題する特殊講義を、私自身にとって37年にわたる名古屋大学訣別の記念として、講じつつある。文字どおり私の最終講義である。本稿はその第1講として、昭和62年10月23日、30日の2日間にわたって語ったものの要旨であることを付言させていただきたい。

（昭和62年12月1日）